一般財団法人 島根県水泳連盟

これまでのあゆみ

終戦後、スポーツ復興の機運が高まり、昭和21年5月、新しく島根県水泳連盟を再組織し、中村仁三、福井誠、永井正員、那須純哉、岡部幸明の5人の選手が島根の水泳の黄金時代を築いたとされる。

特に、福井、岡部の両選手は昭和39年の東京五輪に出場し、見事800mリレーで銅メダルを獲得した。この大会で福井選手は日本選手団の旗手、水泳競技の主将という大役を務めた。その後、全国各地にスイミングクラブが誕生し始めた。昭和45年11月島根県においても「島根スイミングスクール」が誕生し、昭和57年の「くにびき国体」に向けて選手養成に着手した。そして香山進介選手（モントリオール五輪・モスクワ五輪代表）、坂本弘選手（モスクワ五輪・ロサンゼルス五輪代表）のオリンピック代表を輩出し、数々の日本記録の更新や、国際大会での活躍がしまねの水泳の黄金時代を築いていった。

くにびき国体で活躍したジュニア選手も後に大きく成長し、野口智博選手がアジア大会で優勝するなど国内外で活躍した。同時に全国大会の誘致も積極的に取り組み、昭和55年の全国中学、56年の全国ジュニアオリンピック夏季、くにびき国体の翌年の昭和58年日本実業団、昭和61年日本高校、昭和63年の全国国公立大学選手権まで毎年のように全国大会が島根県立水泳プールで開催された。

これが島根県の競技会運営レベルを全国に通用するまでに押し上げていった。これは競泳競技だけでなく、数々の日本チャンピオンを輩出した飛込競技、くにびき国体で優勝した水球競技（江津市開催）、またその後新たな取り組み種目として、シンクロナイズドスイミング（現在はアーティスティックスイミング）の選手育成、指導者養成にも着手し、後に全国ジュニアオリンピックでのソロ競技で準優勝するまでに成長し現在に至っている。また同時に、水泳連盟組織の基盤強化にも着手し、昭和56年6月1日に財団法人島根県水泳連盟が新発足し、日本で初めて水泳連盟がスイミングスクールを直営する新島根方式を作り上げ全国から注目を浴びた。

島根スイミングスクール松江、出雲、江津と順次開校した。県内のスイミングスクールも15クラブを超え、それぞれが切磋琢磨して水泳人口拡大のために会員の獲得や将来有望選手の発掘、強化に取り組んだ。その後平成16年にインターハイ「中国04総体」を新設された島根県立水泳プールで開催した。台風の影響を受けながらも関係者の的確な判断で無事終了することができた。残念ながら地元選手の入賞を獲得することはできなかった。

その後、指導者が諦めることなく選手強化に取り組む中で明るいニュースがあった。平成27年の全国中学において、松江市立湖南中学校の女子4×100mリレーが優勝したのである。さらに翌年もメンバーが変わるも2連覇を達成したことは、まさに快挙である。また飛込競技においても、須山晴貴選手が中学、高校、大学とそれぞれの区分で日本一を獲得した。

これはジュニア時代から計画的に強化に取り組んだこと、選手と指導者が強くなるための時間を惜しまなかったこと、あらゆる分野からのサポートが実を結びこの結果が生まれたのである。その後、東京オリンピック、パリオリンピックの出場を目指し挑戦するも、あと一歩のところで代表の座をつかむことはできなかった。今後の活躍に期待する。

現在の状況

令和に入り、新型コロナウィルス感染症が拡大し、国内外の主要競技会をはじめ県内の公式競技会や強化合宿、指導者研修会などが次々に中止となる緊急事態となった。選手、指導者、関係者ともに先行きが見えない不安を抱えながらも試行錯誤を重ねる時期が続いた。競技会での新たな取り組みとして「ライブ配信」を計画した。島根のような地方での競技会でも選手たちの力泳や競技結果等がリアルタイムで映像として視聴できるようになったことは新たな一歩となった。我々は今回の経験を活かし、より安全で安心な競技会運営が構築され、何よりも選手のための競技会としてスタートできたことが大きな財産となった。

これから

6年後に開催予定の「2030年島根かみあり国スポ・全スポ」に向けての準備が何よりも重要となる。令和4年からスタートしているジュニア選手の強化策を確実に進め、島根県の選手の活躍を期待する。

次に競技会運営も重要となる。競技役員、審判員の養成と資質の向上が課題となる。これも令和4年から段階的に養成事業を進め、順調に推移している。そして施設整備である。現存の施設をどこまで整備するか、新たに必要なものは何かを関係機関と協議し、島根県の特色を活かした、島根県に行って良かったと感じてもらえるそんな大会にしたいものである。

中国五県対抗水泳競技大会に参加した島根県選手団